

“兄弟都市から生まれた交流”

両市の交流は、兄弟都市を宣言する前から今日まで60年の歴史がある。

市の広報誌や関係者の著書、新聞記事などをひもとくと、その厚みを物語る数々のエピソードが残されている。そのいくつかを紹介しよう。

INTERACTION

交流の歩みを振り返る

両市の友情が交流の礎に

出会いは60年前、沖縄で

1964年（昭和39年）10月、大阪府道路協会の沖縄道路事情調査団が沖縄を訪問した際、沖縄の市町村長との懇談会が那覇市で催された。その席で、コザ市の大山朝常市長と、調査団に参加していた豊中市の竹内義治助役（1966年（昭和41年）5月から市長）が出会い、その後の交流につながっていく。当時、大山市長の息子が大阪大学に在籍し豊中市に住んでいたことが、2人を結びきっかけとなった。

懇談する中で大山市長は、アメリカ軍政府の管轄下にある沖縄は本土の事情が分かりにくく、何とか職員に本土の都市を視察させ勉強させたいが、軍政府はそれなら台湾やフィリピン、ハワイの都市へ行けというので困ると話した。それを聞いた竹内助役は、豊中市に来て職員として仕事をしながら勉強してはと提案し、両市で実現させようと話が弾んだ。

沖縄戦遺族への贈り物

その翌月、大山市長は豊中市を視察に訪れる。竹内助役は、沖縄の摩文仁を訪れた時に見た仏桑華（ハイビスカス）の赤い花が、激戦地で散った兵士の血潮を連想させ強く胸を打たれたことを語り、豊中市には沖縄戦の遺族も

多いがほとんどの人は遺品も満足にない状況であることを話した。形見になるものを送ってほしいという頼みを受け、大山市長は1964年12月、摩文仁海岸の小石に入魂した「霊石」を豊中市に送り届ける。仏桑華の苗木20本も添えられていた。



木箱にぎっしりと詰められた「霊石」
（1964年12月8日）

苗木は温室で育てられ、1966年（昭和41年）2月に初めて花を開く。沖縄を訪問する職員にその写真と竹内助役の手紙を託し、遺族に分けると伝えたところ、大山市長から、多くの遺族にと、さらに120本の苗木が贈られ、職員が持ち帰った。



温室で見事に花開いた仏桑華
（第二清掃工場、1966年2月11日）

学び合い、友好を深める

コザ市職員の研修については、コザ市の玉山憲栄助役が豊中を訪れて竹内助役と懇談し、調整が進められた。1965年（昭和40年）12月に最初の職員が派遣された。6か月間、都市計画事業に携わり、以降、毎年数人ずつ豊中に滞在して実務を学んだ。やがて琉球古典舞踊を披露したり、豊中特産の夏菊とイチゴの苗をコザの試験農場に贈ったりするなど交流が広がっていく。豊中市からも職員

がコザ市を訪れ実情を学び合った。いつしかこの研修はコザ市職員の間で「豊中学校」と呼ばれるようになっていく。当時の広報誌では、1967年（昭和42年）に「コザ市と豊中市は姉妹都市以上の関係」との竹内市長の談話があり、1970年（昭和45年）には両市を「兄弟都市」と紹介する記事も見られるようになった。

子どもたちの明るい未来を願う

1970年8月、日本万国博覧会の“沖縄デー”にコザ市の園田青年会が出演するのに合わせ、豊中まつりへの特別出演が実現した。その打ち合わせに訪れたコザ市職員から5月に「沖縄こどもの国」が開園し、整備が進められていることを聞き、豊中から記念に子どもの像を贈ろうと、豊中商工会議所、市民団体8団体と市が協力して募金運動を始めた。制作は彫刻家・吉田勲示さんに依頼し、指揮に合わせて横笛とハーモニカを演奏する3人の少年の像「合奏」が完成。1971年（昭和46年）2月、両市の関係者やコザ市の小・中学生300人余りが見守る中、除幕式が行われた。

その日、大山市長は涙を流していたという。大山市長は沖縄戦で息子2人と娘1人を亡くしており、贈られた像が偶然にも少年2人と少女1人の像であった。その姿は竹内市長の心に深く刻まれ、後年の著作にこの経緯が記されている。



園田青年会が豊中まつりで
エイサー演舞（市民会館、1970年8月22日）

「兄弟都市」を正式に宣言

1972年（昭和47年）に沖縄が本土に復帰し、コザ市は1974年（昭和49年）4月に美里村と合併して沖縄市となる。これを最後に大山市長は5月に退任、くしくも同時期に竹内市長も退任した。

沖縄市の誕生を機に正式に兄弟都市の提携を結ぶこととし、同年11月3日、沖縄市誕生市民祭典の場で町田宗徳沖縄市長と下村輝雄豊中市長が「兄弟都市宣言」に調印した。

像の建立時に送られたメッセージ

「合奏」に寄せて 彫刻家 吉田 勲示 さん

沖縄は太平洋戦争の最も大きな犠牲を払った県であり、終戦後も占領地として数々の苦難を受け続けてきた県である。非戦闘員である多くの人々が非命に倒れた悲しい歴史として、ひめゆりの塔を始め多くの碑として残されている。私はその碑に対して涙する時、明日の沖縄の子どもたちの明るい未来を祈らずにはいられない。本土復帰を機として、本土と沖縄の子どもたちが仲良く手をつないで希望のある平和の国を建設してくれることを念じつつ、「合奏」の少年の像がその心の灯の一つとして役立てば幸いです。



完成した少年の像「合奏」を豊中の関係者にお披露目
（右から吉田さん、竹内市長、鈴木豊中商工会議所会頭、市民会館、1971年2月10日）

INTERACTION 2

平和を願う取り組みを積み重ねて

平和交流

両市が願う平和への思い

豊中市と沖縄市の兄弟都市提携は、
戦争の悲劇から生まれた
深い平和への願いに共鳴し始まった。



1986年「非核平和・戦争資料展」準備中の様子。
沖縄市、沖縄県平和祈念資料館の協力により開催

平和を願って始まった 都市間交流

両市の交流のきっかけとなったのは、沖縄戦で亡くなった方の遺族への霊石と仏桑華（ハイビスカス）の贈呈。その行為自体が平和への強い思いを感じる。また、1974年（昭和49年）11月3日に兄弟都市宣言が締結された際、その宣言書にも「市民福祉と平和を祈念して」という両市の明確な意志が記されている。50年にわたるこの交流は、こうした平和をめざす共通の願いに基づいた多様な交流を通じて発展してきた。



さまざまな平和交流

沖縄市が非核平和宣言を行った翌年、1986年（昭和61年）には、豊中市で「非核平和・戦争資料展」が開催された。1989年（平成元年）から1996年（平成8年）にかけては、新成人平和親善使節の交流が行われ、若い世代に平和の大切さを伝える活動が推進された。

さらに、1999年（平成11年）には平和・友好パネル展「沖縄戦から学ぶ」を豊中市庁舎で開催し、戦争の悲惨さを市民に伝える機会を提供。

2004年（平成16年）には、兄弟都市提携30周年を記念して「沖縄市平和資料展巡回展」が豊中市の各公民館で、「沖縄の平和とアメリカンスクール」展を人権まちづくりセンター（現在の人権平和センター豊中）で開催。2010年（平成22年）にも同施設で「沖縄戦と戦後復興」パネル展を開催した。

両市の絆の根底には、平和への強い思いがある。沖縄の「いちゃりばちょーでー（出会えば兄弟）」という言葉に由来する「兄弟都市」には、互いを思いやる、平和を希求する精神が込められている。

豊中市と沖縄市は、より若い世代への平和教育にも力を入れ、両市の子どもたちが相互に訪問し、平和について学び合う機会を設けてきた。2014年（平成26年）には沖縄市市民ミュージカル「コザ物語」を豊中市で公演し、同年中学生平和大使を両市で派遣。この交流は、両市の子どもたちに平和の尊さを伝える重要な役割を果たした（73・74ページ参照）。

50周年となる今年は、両市の高校生による「平和学習プロジェクト」を実施し、両市の若者が直接交流することで、平和意識の向上と相互理解を深めることを期待している（75・76ページ参照）。

未来へとつながる平和の絆

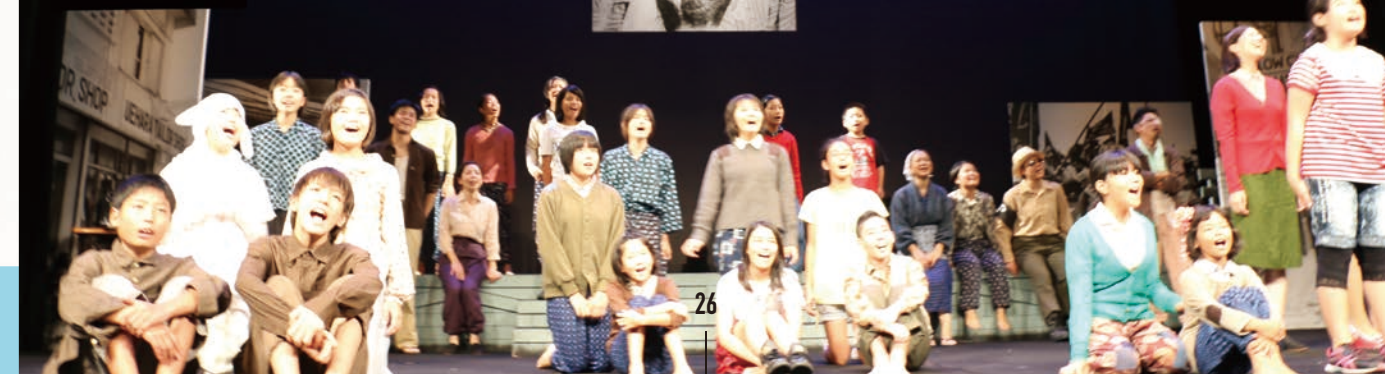
今後も、教育、文化、市民交流などあらゆる面で協力し、平和な社会の実現に向けて努力を重ねていく。両市の市民が平和について考え、議論する場を提供することで、草の根レベルでの平和意識の醸成に貢献し、未来へとつながる平和の絆をさらに強化していくことをめざす。

CHECK

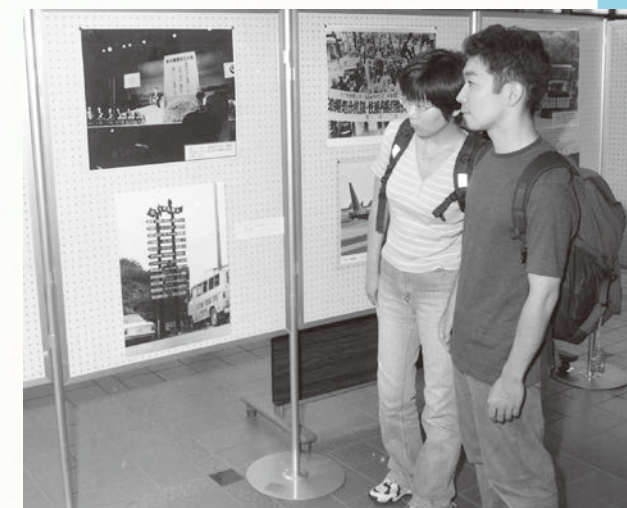
兄弟都市提携40周年記念 沖縄市市民ミュージカル「コザ物語」

終戦後のコザで、親を失い行くあてもない子どもたちに生涯をささげ、「沖縄社会福祉の母」と慕われた島マスさんをモデルに誕生したミュージカル。

出演者は、沖縄市の小中学生を含む44人で、この公演のため何カ月も練習を重ねた。大迫力の演出や、笑いあり涙ありの感動のステージが繰り広げられる中、盛況のうちに幕を閉じた。



兄弟都市から生まれた交流



1999年 平和・友好パネル展「沖縄戦から学ぶ」

INTERACTION 3

海を越えた復興の願い

阪神・淡路
大震災への
支援

沖縄市で広がる支援の輪

豊中市では大阪府内の市町村の中で最も甚大な被害が発生していた。多くの市民が避難所生活を送るなど、1日でも早い復興が願われる中、2日後には沖縄市から助役らが見舞いに駆け付け支援を申し出た。

沖縄市および市職員厚生会、市議会議員などから500万円を超える義援金と、約160kgの黒糖が贈られた。また、消防や水道局などの職員8人が支援隊として豊中市へ派遣され、現地で復興活動を行った。その支援の輪は市民へと広がり、沖縄市内各地でチャリティーイベントが開催され、その収益を義援金として豊中市へ贈ったのだ。

最終的には総額900万円を超える義援金と共に、多くのウチナーぬチムグクル（沖縄の真心）が届けられた。

未曾有の被災に
兄弟としての支援

1995年（平成7年）1月17日午前5時46分。
淡路島北部を震源とする
マグニチュード7.3の地震が発生した。
被害は豊中市にも及び、
多くの豊中市民が被災した。
海の向こうの沖縄市はその様子を知り、
兄弟都市の復興を願い動き出した。



1995年5月号の「広報おきなわ」。
豊中市支援チャリティーの
模様が紹介されている。



さまざまな形で支援を受け
取った豊中市は市職員有志
で「友好の会」を発足し、計
100本の桜の苗木を沖縄市へ
寄贈した。その桜は「友好の
桜」として沖縄市の倉敷ダム敷
地内に植樹された。

ヌチグスイツアーで沖縄市へ

4月21日、沖縄市で「阪神大震災豊中市被災者受入協議会」が発足した。被害を受けた豊中市民のため、無料で3泊4日の沖縄ツアーを企画し、招待したのだ。

そのツアーはヌチグスイ（命の薬）ツアーと銘打たれ、計40名の豊中市民が沖縄を訪れ、懇親会、エイサー、市歴史公演、市内散策などを楽しんだ。



1995年6月号の「広報おきなわ」。
ヌチグスイツアーについても紹介

支え合う兄弟都市は続く

国全体を揺るがす災害であった「阪神・淡路大震災」。大きな被害を出しながらもどうにか復興し、現在目に見える傷跡はほとんど残っていない。しかし、この沖縄市からの支援を豊中市は忘れない。

この日本において、地震や台風といった災害は避けては通れない。予想だにしない災厄が両市を襲う可能性は否定できないが、両市は頼りになる兄弟がいることを知っている。今後も互いに支え合い、困難を共に乗り越えていこう。

INTERACTION 4

若い市民間の交流を活発に

青年会議所
同士の交流

始まった市民間交流

1964年（昭和39年）に霊石が贈られたことなどから始まった両市の交流。1974年（昭和49年）には兄弟都市となり、行政主導の交流は深まっていた。

そんな中、豊中青年会議所が設立20周年を迎えた1987年（昭和62年）。記念の絵画コンクールを開催し、最優秀賞となった10人の小学生を親善使節として沖縄市へ派遣した。その5年後の1992年（平成4年）には正式に姉妹JCとなり、青年会議所同士の交流がその後豊中まつりや少年サッカー交流などの多岐にわたる市民主導の交流につながっていった。

そして現在も「これまでの諸先輩方が作り上げてきていただいた歴史をつないでいく必要がある」という考えのもと、32年間絶やすことなく交流を続けている。

交流事業紹介

■ 姉妹締結20周年協働事業

いざ勝負！野球でオールスター対決

2012年（平成24年）8月4日

豊中市が高校野球発祥の地であることから、両市の中学生選抜による野球交流を豊中市ローズ球場で実施。両市の選抜チーム同士の対決を2試合、両市の混合チームによる対決を1試合行った。バーベキューパーティーなどでも親睦を深め、未来を担う子どもたち同士の絆や人の輪を深める取り組みとなった。



兄弟都市に続き、姉妹JC締結

一般社団法人豊中青年会議所と
一般社団法人沖縄青年会議所は
姉妹JC（青年会議所：Junior Chamber）を締結している。
1992年（平成4年）7月に姉妹JC締結調印式が行われ、
姉妹JCとして32年間、交流を続けている。

(社)沖縄青年会議所・(社)豊中青年会議所
姉妹JC締結調印

姉妹JC締結調印の様子

■ 姉妹締結30周年記念式典事業

～一度出会えばいちゃりばちゅーで～

／ U-15バスケット交流 2022年（令和4年）11月20日

スポーツを通じた共同事業を行い、より強固で永続的な関係を構築し次世代へと継承していくため、沖縄市で両市の中学生選抜によるU-15バスケットボール交流を実施。また、沖縄アリーナで琉球ゴールデンキングス対滋賀レイクスの試合を観戦するなど交流を深めた。



INTERACTION 5

兄弟都市交流とともに

豊中まつり

ちよーでーたちの絆が芽生える場

豊中まつりは

「いちゃりばちよーでー（出会えば兄弟）」の言葉のように、多くの豊中市民と「沖縄」の出会いを生み出し、「きょうだい」の絆が芽生える場所となっている。

豊中まつりとは

「豊中まつり」は例年8月第1週の土曜日・日曜日（2024年（令和6年）は10月開催）に豊島（てしま）公園を中心に開催され、約20万人が来場する豊中市の市民祭りである。「豊中」まつりという名称だが、最も特徴的なのは兄弟都市である「沖縄」を大きく取り上げている点だろう。ステージでは沖縄にゆかりのあるアーティストのライブや、エイサーを筆頭とした沖縄の伝統芸能が披露されるなど、夏の暑さも相まってここは沖縄かというような錯覚を起こさせるほどの熱気を帯びた祭りである。また、多くの沖縄市民が見物や出店のために訪れる、都市間交流の場としても大きな役割を担っている。

2024年で57回を数えるほど長年市民に愛されていることから、祭りを通して沖縄市と豊中市が兄弟都市であることを知る市民も少なくない。

history

- 1951: 豊中まつりの前身である第1回豊中商工祭が開催
- 1968: 記念すべき第1回豊中まつりが開催。民謡踊りパレードに公民分館など23団体・約1,000人が参加した。
- 1972: 第5回豊中まつり。美術展や市民音楽の集いを開催するなど、規模を拡大
- 1980: 馬車のパレードやミニSLの乗車体験など、子ども向けイベントが充実
- 1992: 「いきいき豊中まつり」に名称を変更。市内各所で催しを開催する形式となった。
- 1995: 1月に阪神・淡路大震災が発生。中止も検討されたが、市民を元気に盛り上げるため開催。沖縄市よりエイサー隊も駆け付けた。
- 1997: 市民ボランティアが企画運営に関わる祭りに変化。沖縄を大きく取り上げ、開催場所を豊島公園周辺に移した。
- 1998: 「ピースフルラブ・ロックフェスティバル」出場をかけたオーディションが始まる。
- 2001: 市内で活動するNPOが店を並べる「市民活動ふれあい広場」が始まる。
- 2017: 記念すべき第50回豊中まつりが開催
- 2020・2021: コロナ禍によるWeb豊中まつりの開催
- 2022: 有観客による豊中まつりが復活。WEBまつりも同時に開催された。
- 2024: 兄弟都市提携50周年。開催時期を10月に変更

豊中まつりと沖縄市の出会い

豊中まつりが沖縄に注目し始めたのは1996年（平成8年）に豊中まつり検討委員会が設置され、「市民がつくる、市民のまつり」という「新生豊中まつり」をめざしたのがきっかけである（83ページ参照）。翌年に兄弟都市である沖縄市が本土復帰25周年を迎えることから、沖縄の伝統文化や生活文化の紹介を実施する運びとなった。

翌年の「豊中まつり'97」では「沖縄がやってくる」をテーマに、従来の内容に加え「ネーネーズのコンサート」や「沖縄屋台村」といった沖縄色を前面に打ち出し、バラエティーに富んだ祭りへと生まれ変わった。当初の予想をはるかに上回る大勢の市民の皆さんに楽しんでいただくことができたことで、「新生豊中まつり」が始まり、現在に至るのである。



豊中まつり'97にて沖縄の芸能が披露される。

沖縄音舞台

現在の豊中まつりでは「沖縄音舞台」と銘を打たれたステージが展開されている。豊中市・沖縄市兄弟都市のつながりを感じさせるステージである。

沖縄音舞台の始まりは2004年（平成16年）。当時、千里中央で行っていた「豊中ピースフルラブ・ロックフェスティバル・オーディション」を例年実施していた「沖縄ひろば」と合体させ開催された。

先述のとおり、アーティストやエイサーがまつり会場を盛り上げる。近年は両市の高校生バンドが出演するなど、さらなる展開を見せている。締めくくりにはカチャーシーが披露されるのが恒例で、沖縄音舞台並びに豊中まつり全体が一体となり、フィナーレを迎える。

interview

人・ヒト

沖縄音舞台 部会長 谷口 純一 さん

2005年（平成17年）に勤務先の同僚である湯川さん（当時の沖縄音舞台部会長）に声を掛けられ豊中まつりに関わるようになりました。そこから長年、アーティストのブックイングなどでまつりに関わってきましたが、コロナ禍により有観客でまつりが実施できなかった2020年（令和2年）、2021年（令和3年）は例年とは勝手が違い、部会も難しい局面を迎えることもありました。どうにかつなぎとめてきました。そんな中で2022年（令和4年）に部会長に就任したため、湯川さん・塩谷さん（前任の部会長）のためにも現在の沖縄音舞台を守っていくのが私の使命だと思っています。



盛り上がりを見せる沖縄音舞台（豊島公園。2023年8月）



2004年に始まった沖縄音舞台で披露された「豊俵会」によるエイサー演舞（豊島公園）

INTERACTION 6

豊中まつりからロッカーが出演

ピースフルラブ・
ロック
フェスティバル

始まりと変遷

1983年(昭和58年)8月21日、恩納村の沖縄グランドパークで開催されたコンサートが「ピースフルラブ・ロックフェスティバル」の始まり。ロックシーンをけん引した伝説のバンド「紫」の再結成コンサートだった。幾多の変遷を経て、実行委員会主催によるロックフェスとなる。やがて会場は沖縄市野外ステージ(旧・闘牛場)に定着し、沖縄市の一大イベントとなった。コザの大師所から本土や海外のプロミュージシャン、出演を契機にメジャーとなる若手バンドらが出演し、数々の伝説が生まれてきた。第34回(2017年)からコザ・ミュージックタウンに会場を移し、2024年(令和6年)には開催第39回を迎えた。



2017年よりコザ・ミュージックタウンに会場を変更

コザにロックは欠かせない

1960年代のコザ「センター通り」(現・中央パークアベニュー)。ベトナム戦争にかり出される米兵たちの一時のよりどころ、はけ口だった。彼らの心情を受け止め、全身を振動させる強烈なビートで呼応したのが、さまざまな生い立ちの若きミュージシャンたち。こうして基地のまち・コザにロックが根付き、歓声と喧騒のもと独自の進化を遂げていった。そこから、平和と愛を掲げる「ピースフルラブ・ロックフェスティバル」が誕生した。



沖縄市野外ステージ(旧・闘牛場)で盛り上がりを見せるピースフルラブ・ロックフェスティバル(2004年7月)

兄弟都市交流 ～ 憧れのロックフェスをめざして ～

第17回(1999年)からは、豊中まつりのコンテストで選ばれた本土のバンドが出演している。ロックフェス・プロデューサーの徳山義広さんの尽力、そして豊中まつりの「沖縄音舞台」を担う市民ボランティアによって実現した。

ロッカーたちの聖地、コザのロックフェスに出演できると、全国からアマチュアバンドのエントリーが殺到。事前

のテープ審査で勝ち残ったバンドが、豊中まつり本番で競い合い選ばれる。兄弟都市交流が、全国の若者の音楽交流へと広がったのだ。

第38回(2023年)で幕を閉じたが、この取り組みを契機に、高校生バンドやダンスの交流が始まっている。これからも、兄弟都市交流の広がりや世代継承に大きな役割を果たしていくだろう。

平和と愛を掲げて

かつて闘牛場だった沖縄市野外ステージから数々の伝説が生まれ、コザの音楽文化を育む土壌となってきた。思い起こせば、この土壌は、ベトナム戦争の頃から平和と愛を渴望する若者たちによってもたらされたもの。それを耕してロックフェスが生まれたことを忘れてはならないだろう。

これからも、若者たちが平和と愛を希求して巣立つロックフェスとして発展していくことを望んでやまない。

interview

人・ヒト

沖縄の音楽文化を
支え続ける
徳山 義広さん



「僕が関わったのは第6回(1988年)から、以来ずっと続けている」と徳山さん。芸能プロモーター、音楽プロデューサー、PA(音響システム・オペレーター)として活躍。愛称「徳さん」は、コザのミュージックシーンに欠かせない存在・重鎮として愛されている。

その長く深い経験は風貌に刻み込まれているが、表情はいつも穏やか。「出演バンドとの交渉、バックアップしてくれる団体との調整、資金繰りに苦労してきたが、コザでやることにこだわってきた」とほほ笑む。そして「第7回目からは実行委員会主催とし、その初代委員長は古堅宗光さんですよ」とも。古堅さんは、当時の観光協会(現・沖縄市観光物産振興協会)の青年部長、音楽関係者はもちろんのこと、各界の人とネットワークを結び、コザに夏の訪れを告げる一大イベントをつくりあげてきたことが分かる。

徳さんは、兄弟都市交流にも一役買ってくれている。本土からの出演バンドを選ぶ「豊中まつり・沖縄音舞台」でのオーディション審査委員長。「本土・豊中のバンド、それぞれに良さがあるさ」と力量の違いは明かさず、まなざしはやさしい。高校生対象に「バンド・インターハイ」を企画し、若手ミュージシャンの育成にも力を入れているからだろう。

これからの夢は?と問いかけると「ヒ・ミ・ツ」と煙に巻かれたが、そのいたづらっぽい表情から、ロックフェスを慈しみ育ててきた心意気がにじみ出ている。それは、誰も排除しない、みんな受け入れて共に生きていく、いわば「否戦のころ」が源ではないか。沖縄の音楽文化は(もしかすると琉球王朝の頃から)このようにして生まれ、支えられているのだ。(インタビュー・田中逸郎)

徳山 義広(とくやま よしひろ)さん
(有)サウンドパッケージ・代表取締役、コザ・ミュージックタウンの運営にも参画してきた(旧指定管理者)。その他、(株)ミュージックウェーブ・代表取締役、コザメトロ代表、琉球国祭り太鼓理事長、沖縄商工会議所第1号議員、ピースフルラブ・ロックフェスティバル・プロデューサーなど多彩な活動を続けている。

Who's NEXT

豊中まつりの
オーディションで選ばれ、
出演したバンド

- 1999:Eyes
- 2000:パダンパダン
- 2001: Messiah
- 2002: 敏司餃子北京亭
- 2003: SOUL NATION
- 2004: BOMB SHOP
- 2005: ねぐりぢえ
- 2006: Fain Day's
- 2007: OVER SKA DRIVES
- 2008: FUNKY☆ROCKERS
- 2009: 蕾
- 2010: mana-musica
- 2011: YULO
- 2012: 陸奥守吉行
- 2013: ゴーカートモンキー
- 2014: THE 春夏秋冬
- 2015: 大山まき(台風により中止)
- 2016: さしすそぞ
- 2017: ビリー→部
- 2018: ソウルソウス
- 2019: ロッカクレンチ
- 2020: ソラマメです(コロナにより中止)
- 2021: ソラマメです(コロナにより中止)
- 2022: ソラマメです
- 2023: Buddhadatta
- 2024: RABI (オーディションではなく、豊中まつりの推薦により出演)



INTERACTION >

沖縄伝統芸能で深まる両市の絆

エイサーを通じた交流

交流の要となったエイサー

沖縄市と豊中市の交流において、大きな要となっている「エイサー」。

50年前は沖縄県外であまり知られていなかったこの伝統芸能が、兄弟都市交流が深まるにつれ広く知られるところとなり、いまや両市共に親しむ文化となった。

エイサーのまち・沖縄市

前述の「沖縄全島エイサーまつり」は沖縄を代表する夏の「まつり」として成長発展し、今やエイサーのメッカとして県外・海外からも大変注目され高く評価されている。

エイサーの果たす役割は、地域文化の発信、まちの活性化、青少年の健全育成、地域経済などにも多大な効果をもたらしている。特に、各地域の青年エイサーは、青年会活動の核となり、エイサー継承発展に大きく貢献している。活動を休止していた青年会がエイサーを通して復活するなど、青年会活動の維持発展と青少年の情操教育にも大きな影響があるといっても過言ではない。

沖縄全島エイサーまつりが60年以上開催され、今では夏の風物詩として定着し全国有数のまつりに発展してきた中で、地域文化資源としてのエイサーが今後さらに継承発展し、沖縄市のめざす文化・芸能の薫り高いまちの実現に向け推進していくことを目的として、2007年（平成19年）6月に「エイサーのまち」を宣言している。



2012年、胡屋十字路に設置されたエイサーモニュメント

豊中に届いたエイサー文化

■ 豊中へのエイサー団体の派遣

豊中市と沖縄市の兄弟都市提携40周年を盛大に祝うとともに、より深い交流を図るために、2014年（平成26年）の豊中まつり前夜祭へ沖縄の「東青年会」が派遣された。東青年会は豊中市内で道ジュネー形式によるエイサー演舞を披露し、多くの観客を魅了した。



東青年会が豊中市内で道ジュネーを披露

■ 豊中に生まれたエイサー団体「豊優会」

毎年、豊中市で開催されている「豊中まつり」に1999年（平成11年）の夏「まつりネット」というボランティアで参加し、その時エイサーに触れて感動した初期メンバーによって「豊優会」が誕生。2024年（令和6年）で結成25周年となる。

沖縄市の諸見里青年会や兵庫県尼崎市の琉鼓会と関わりがあり、演舞の型は諸見里青年会の流れをくんだ勇壮なエイサーとなっている。日頃は、「豊中まつり」をはじめとした地域の祭りや福祉施設への慰問、沖縄にゆかりのあるイベントなどでのエイサー演舞を行っている。

東青年会 -----

1993年（平成5年）に結成され、2024年で結成32年目となる沖縄市宮里区域の青年会。エイサー演舞は旧美里の仲原地域の型を変化させたもので、独自に型を練り合わせ曲目も増やし、試行錯誤した上で、現在のエイサーへと変遷。ダイナミックな動きもさることながら、勇壮な大太鼓、ガマクの締太鼓、力強い手踊り、四つ竹や扇子で華麗に舞う女踊りなど緩急をつけた演舞が特徴。

豊中エイサーが
沖縄全島エイサーまつりで演舞

沖縄市市制施行50周年および国内兄弟・姉妹都市との都市提携周年を記念し、国内兄弟・姉妹都市で活動するエイサー団体を1団体ずつ招聘する周年事業を沖縄全島エイサーまつり実行委員会にて決定。豊中市からは、「豊中エイサー豊優会」を招聘し、まつり最終日に出演した。



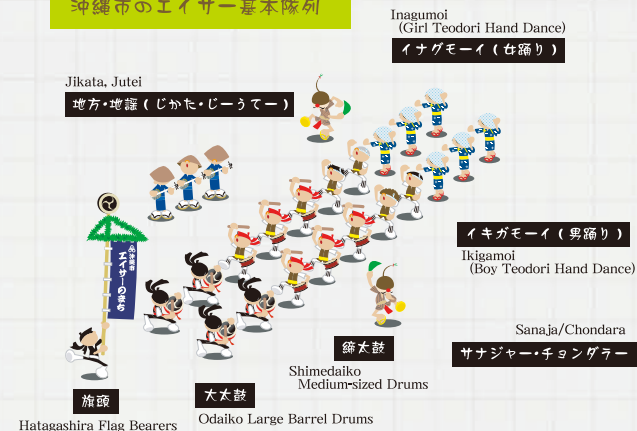
本場沖縄市で演舞する「豊中エイサー 豊優会」(2024年8月25日)

エイサーとは -----

本土の盆踊りにあたる沖縄の伝統芸能の一つで、主に各地域の青年会がそれぞれの型を持ち、旧盆の夜に地域内を踊りながら練り歩くもの。

一言で「エイサー」といってもその形態はいくつかに分類され、現在ほとんどの青年会が、大太鼓、締太鼓を中心とした「太鼓エイサー」であり、沖縄県中部が最も盛んな地域といわれている。その中でも旧与那原町、旧勝連町で見られるエイサーは「パーランクー」という片張りの太鼓を用いたエイサーがほとんどで、締太鼓とは違った雰囲気を醸し出す。また、太鼓を使わない「手踊りのみのエイサー」もあり、本島北部にいくつか存在するが、これがエイサーの最も古い形ではないかといわれている。近年では、エイサーの型を取り入れ、音楽はポップスを使用するなど、衣装も独創的な「創作太鼓」のグループも多く存在する。

沖縄市のエイサー基本隊列



INTERACTION 8

多彩な分野で交流が広がる

兄弟都市提携 40周年 記念事業

提携40周年をPR

2014年（平成26年）

兄弟都市提携40周年記念事業のテーマは、「人と文化の絆を未来へ」。次世代の学びと相互理解を進め、友好と信頼の絆を未来につないでいこうと、多彩な分野で記念事業が実施された。

また、記念のロゴマークも作成。沖縄市在住のデザイナー・仲地のぶひでさんによるもので、兄弟交流（ちよーでー・ちゃんぶるー）を表した交じり合うハートが大きく描かれている。

小学生テレビ会議

4月～6月／
10月～12月

両市の小学生が、ウェブテレビ会議システムを活用して、いろいろなテーマで交流学習をした。

豊中市立庄内小学校と沖縄市立北美小学校の5年生はお互いの地域の風土や文化を紹介。豊中市立上野小学校と沖縄市立比屋根小学校の6年生は、戦争について学び、考える平和学習を行った。



沖縄の小学生が三線を演奏し、豊中の小学生が沖縄民謡を歌う交流も。

次世代へと市民がつなが 友好のバトン

豊中市と沖縄市が兄弟都市を提携してから40周年となった2014年（平成26年）。提携当初は行政間での付き合いだったものの、次第にその軸は市民同士の交流へと移り変わっていった。そして、節目となる40周年では大勢の市民が参加して、教育やスポーツ、文化芸術などさまざまな分野で記念事業が行われた。



高校野球発祥の地や沖縄の伝統楽器・三線（さんしん）など、両市の魅力も描かれている。

コザ高校ラグビー部公開練習

12月



コザ高校は、2年ぶり13度目の代表出場

沖縄市のコザ高校が、全国高等学校ラグビーフットボール大会に沖縄県代表として出場。大会前に、マリンフード豊中マルチグラウンドにて公開練習を行った。

また、近鉄花園ラグビー場で行われる試合本番には、豊中市民で結成された応援団が集結。旗を振りながら、熱い声援を送った。



式典・市民大交



「兄弟都市40周年共同宣言」を行った
沖縄市桑江朝千夫市長（左）と豊中市浅利敬一郎市長（右）

市民大交流会

11月

記念式典と同日、友好と交流を一層深めようとコザ・ミュージックタウン音市場で開催。兄弟都市ソングのお披露目やエイサー、地元ミュージシャンによる演奏などで大いに盛り上がった。

また、両市の市民によって泡盛を甕（かめ）に入れるというイベントも。10年間貯蔵して熟成させ、50周年の際には乾杯しようという、両市民の思いがあふれる未来に向けた企画だ。



50周年で
乾杯するために！



フィナーレはやっばりカチャーシー

兄弟都市から生まれた交流

記念式典

11月



40周年調印書

沖縄市のコザ・ミュージックタウン音市場で、両市の交流に携わってきた関係者や市民などが参加し、兄弟都市提携40周年の記念式典が開催された。式典は、大阪音楽大学の皆さんによる声楽に始まり、これまでの歩みを映像で振り返るなど、最後は、今後もより交流を図っていくことを確認し合う「兄弟都市40周年共同宣言」を行った。

CHECK

両市民が互いに訪問 市民交流ツアー

8月1日～3日／
11月7日～9日

40周年を記念して、両市ともに兄弟都市を訪れるツアーを開催。豊中ツアーでは「日本民家集落博物館」などを訪問し、沖縄市ツアーでは「コザのまちあるき」などが行われ、共に存分に楽しんだ。



豊中ツアーでは、豊中まつり前夜祭の市民交流会に参加
（2014年8月1日、ホテルアイボリー）

INTERACTION 9

交流の今後のあり方を共に提言

40周年
共同研究

両市若手職員が未来を見据えて

2014年（平成26年）、
豊中市・沖縄市兄弟都市提携40周年事業として、
両市の若手職員により、
「豊中市・沖縄市の都市間交流の新たな展開」を
テーマに共同研究を行った。

互いの市を訪れ、活発に意見交換

この共同研究は、兄弟都市宣言から40年を迎えるにあたり、両市が共同で兄弟都市交流の現状を振り返るとともに、課題の把握や、解決のための連携方策などを検討・提言することで、両市の市政運営と都市間交流のさらなる活性化に寄与することを目的として実施したものである。



沖縄こどもの国を訪れた
豊中市の職員

豊中市、沖縄市それぞれで、調査・研究のためのグループを設置。必要に応じて両市のグループメンバーがお互いに訪問し、議論した。調査研究のために行った会合は8回に及び、活発な意見交換が行われた。この共同研究を通して、両市職員の共同作業が生まれ、交流を深めることができた。

50周年にも生きる提言

8カ月にわたる調査・研究の成果を報告書にまとめ、両市で報告会を実施した。同報告書では、兄弟都市交流の意義・目的は、両市の違いを知ることによる「自都市の資源・特性・能力や課題の再認識」であり、「両市それぞれの強みにより補い合い、地域の活力や生活の質を高めあえる環境づくりである」と定義づけている。さらに、この意義・目的が重要であるとの認識に立ち、兄弟都市交流の課題と両市がめざすべき方向性、そして提携50周年に向けて、担い手（人材）の育成や交流事業の幅を広げることなど取り組みへの提言を併せて行った。

兄弟都市交流の意義・目的や、提言の内容は10年を経過した現在においてもなお方向性が変わるものではなく、今後も引き続き取り組んでいくべき内容である。



豊中市で行われた
調査研究報告会の様子

interview

人・ヒト

豊中市こども未来部 こども事業課 主幹
（当時：とよなか都市創造研究所 主任研究員）

森 崇徳 さん

都市間交流は、職員が多様な考え方や価値観に触れることで視野を広げることができる大切な取り組み。そのような機会を多くの職員が経験することで、市全体の豊かさにつながると感じています。共同研究では兄弟都市の職員と長期間をかけて提案を創るという、非常に貴重な経験をさせていただきました。共同研究で交流を深めた両市職員の絆は今も大切にしています。

沖縄市経済文化部 文化芸術課 係長
（当時：沖縄市教育委員会教育部
生涯学習課主事）

宮平 栄 さん

当時は振り返ると、共同研究グループの一員として臨んだものの、右も左も分からず、豊中市の皆様にお世話になりながらガムシャラに取り組んだことを思い出します。この経験は単なる職務上の成長にとどまらず、今でも交流が続く多くの方々とのご縁を結ぶ貴重な機会となりました。豊中市と沖縄市の絆が未来永劫にわたり深まることを願い、私もまた微力ながらその一助となるべく務めてまいります。

INTERACTION 10

豊中の中学生が現地で学ぶ

修学旅行で
沖縄の現在を知る

事前平和学習で沖縄を学ぶ

2024年（令和6年）の修学旅行に向け、前年度より事前の平和学習が始まった。庄内さくら学園ではコザのまちについて調べ、第七中学校では沖縄戦やひめゆり学徒隊についての講演を聞いた。第七中学校の生徒たちからは「平和のありがたさを感じた」や「戦争を学んだ私たちが次へ伝えていかなければならない」との声が挙がった。



BCコザ（公共施設）の屋上から嘉手納飛行場を眺める様子
（豊中市立第七中学校）



ひめゆりの塔で平和を願う一行



沖縄市・コザのまちあるきの様子

現地で見て、聞いて、実感する

そして2校は沖縄へ向かった。「ひめゆりの塔」や「平和祈念公園」を訪れ、平和の礎に記された戦没者の方々に思いをはせた。その後、沖縄市を訪問し、米軍基地とともに発展してきた「コザのまち」を地元のガイドと一緒に歩いた。大阪とは異なるまちなみ、まだドルが使えるお店も見られる。そして、米軍基地を目の当たりにした。また、うちなんちゅ（沖縄の人）の温かさにも触れたことで、戦時中と現在、まだ基地が残る沖縄など、さまざまな観点から「平和」の大切さへの学びを深めていった。



事前学習で作成したコザのまち紹介を持つ小畑さん（左）と大槻さん

interview

人・ヒト

修学旅行を終えて

庄内さくら学園 小畑 ののか さん

実際に沖縄に行くことで、戦争によって悲惨な思いをした人がいることが分かり、平和について深く考えるきっかけになりました。コザは日本とは思えないようなまちなみで、米軍基地は、実際に見るまで日本にあるなんて信じられませんでした。目に焼き付けてきたものを忘れずに、今を生きることを大切にしたいと思います。

庄内さくら学園 大槻 侑嵩 さん

資料やガマを見て、当時の人たちの大変さを思い知りました。自分の目で直接見ることで戦争の悲惨さを痛感しました。コザのまちは豊中とは全然違って、外国の方も歩いていてとても新鮮でした。建物の上から見た米軍基地はとても広くて驚きました。この経験を大切に、戦争を繰り返さないように生きていきたいです。

INTERACTION 17

未来に向けて絆を深める

兄弟都市提携 50周年 記念事業

\ What icon? /

- 平和
- 教育
- 観光
- スポーツ
- 文化

オンラインシンポジウム 「沖縄と豊中から考える 戦争体験の継承」

6月14日

豊中市と沖縄県内で戦争体験の継承に従事してきた方々をお招きし、両市の戦中・戦後の様子や戦争体験を継承する取り組みなどを紹介。今後どのように伝えていけるのかについて、パネリストとシンポジウム参加者で考えた。



多くの市民が参加し、討論を行った。

両市のこれからを 見据えた数々の事業

兄弟都市提携以来、両市は文化・スポーツ・教育・平和など、さまざまな分野で兄弟の絆を深めてきた。50周年を迎える今年は「出会えば兄弟（いちゃりばちよー）～友好の絆を次世代へ～」をテーマにさまざまな事業を実施した。

※紹介する事業は、2024年9月1日時点のものです。

schedule

- 8月18日～31日 写真パネル展「沖縄戦とひめゆり学徒隊」
- 8月16日 とよキネマVol.64 GAMA
- 8月23日～25日 沖縄全島エイサーまつり（33・34ページ参照）
- 9月9日～11月30日 平和展示室 企画展「沖縄市の沖縄戦～戦さ世の（イクサユヌ）少年少女たち～」
- 9月21日 琉楽time×ピアノデュオ新崎姉妹
- 10月18日 豊中まつり前夜祭
- 10月19日～20日 豊中まつり

スポーツによる 市民交流

8月5日～8日

豊中市の小学生が沖縄市を訪問し、少年軟式野球やミニバスケットボールの親善試合を行った。日頃の練習の成果を発揮し、互いの健闘を称え合うなどで交流。また、沖縄市内で社会見学を実施するなど、兄弟都市への理解を深めた。



沖縄の青空のもと汗を流す小学生たち



大阪モノレールの泡盛列車 沖縄市・豊中市

8月3日

大阪モノレールと共に両市の魅力を詰め込んだ観光列車を実施。沖縄市で長年愛されるステッキを中心とした弁当と両市のお酒を130名のお客様に提供した。

同時に大阪モノレール万博記念公園駅では、クラシックコンサートやエイサー演舞のステージ、両市の物産が集結した物産展を開催した。



モノレール車内の様子

綾庭の宴 -AYAMIYA- 豊中出張公演

10月30日

沖縄県内外で活躍するプロ実演家が集結し沖縄市を拠点に活動するマルチエンターテインメントグループ「なかのまちやカラーズ」の代表目「綾庭の宴 -AYAMIYA-」が、桜塚高等学校軽音楽部と豊優会をゲストに加えた特別な内容で公演を実施。

さまざまな沖縄の
芸能が積み込まれた
ステージを展開。



schedule

- 10月31日 かじまやうゆえー 祖母の言葉から沖縄戦を伝える
- 11月2日～4日 沖縄スタディーツアー（75・76ページ参照）
- 11月3日 豊中市・沖縄市 兄弟都市提携50周年記念式典

schedule

- 6月～11月 平和学習プロジェクト ～「平和」の伝え方について考える～（75・76ページ参照）
- 7月～9月 平和パネル巡回展（計6回）
- 7月13日 オンライン学習会
- 7月18日 ランチタイムコンサート
- 7月26日 沖縄のシーサーをつくろう！

沖縄市ってどんなまち？ 作文コンクール

7月27日～8月31日



約150名の小学生から作文が提出された。

兄弟都市提携50周年を機に、豊中市の小学生に沖縄市について知る機会を創出するために、小学生作文コンクールを実施。兄弟都市・沖縄市への理解を深め、学んだことを自身の生活や人生にどのように生かすかを考えてもらった。